

平成25年度 KICS 外部評価

○KICS 外部評価委員

委員長 真鍋和博氏（北九州市立大学 地域創生学群長、地域共生教育センター長）

委員 中嶋重光氏（高知市 副市長）

委員 吉澤文治郎氏（ひまわり乳業株式会社 代表取締役社長）

○評価委員会

平成26年3月24日（月） 15時45分～18時開催

平成26年3月25日（火） 10時～17時30分開催

○評価の主旨

文部科学省により平成25年度に公募された「地（知）の拠点整備事業（Center of Community）」に、高知大学は「高知大学インサイド・コミュニティ・システム（KICS）化事業」を申請し、採択された。県内7地域に大学サテライトオフィスを整備、うち4地域に大学派遣地域コーディネーター（UBC：University Block Coordinator）を常駐させることで、大学と地域との更に密接な関係を構築することを目指し、加えてUBCが高知県の地域産業振興監らと連携することにより、地域における総合的な課題解決のための窓口として機能することを図る。

KICSは平成25年9月から開始し、本年度はKICSを稼働するための各種体制整備に注力した。したがって、平成25年度外部評価においては、各委員から以下の点について主に講評いただいた。

- ・計画通り体制が整備され、実施予定事項は完了したか
- ・今後、KICSを本格稼働するうえでの留意点
- ・次年度以降のKICS外部評価における評価指標

○各委員講評

平成25年度についてはほぼ計画通り、または計画以上の取組で高く評価できる。来年度以降については、評価の問題、特にアウトカム評価をどのように行うかが課題となるが、これは全国的な課題であり、共同で検討することも考えられる。また、地域協働学部には充実したカリキュラムが計画されているが、地域での実習と教室での講義の折り合いをどうつけるかが課題となる。

UBCには研究的な視点で課題を理解する能力や地域の方と協働で課題を解決していく能力、課題の核心を落とし込んでいく役割が求められる。そのためUBCの能力向上のための教育やUBC間の情報共有が重要となる。また、こうしたUBCの活動を地域に浸透させていく必要がある。大学教員の敷居の高い目線ではなく地域に寄り添い、一緒に課題を解決する雰囲気を出していく必要がある。こうした動きを通じて、地域の中にUBCをサポートするチームを誕生させ、将来的には地域の中にUBCのような役割を担える人材を育成していくべきである。

【眞鍋委員長】

UBC4名に対して対象とする地域は7か所あり、空白地域が存在する。空白地域のフォローを検討すべきである。また、県に新たに設置される南海トラフ地震対策推進本部との間で防災に関する連携を図ることも必要と考えられる。

アウトカム評価については、個別の事業ごとのプロセスを評価できる仕組みを、5年後に比較を行うことができるような項目を盛り込み、作り上げるべきである。また、評価内容については地域と大学の関係性を評価する必要があると考えられるため、各地域とどれだけ接点をもったか、各地域にどれだけ広まったかを評価する内容にしていきたい。アンケートは関係大学・事業者・地域住民に対して、カリキュラムごとに実施することも検討してもらいたい。また、シンポジウムの開催を通じて情報交換を行った他地域の事例が、高知大学の取組にどう影響を与えたかを評価する指標も必要である。

最後に、外部評価の時期について、年度を越えて行った方が良いのではないかと。次回の開催時期について検討してもらいたい。

【中嶋委員】

KICS事業の目的は地域が元気になることである。地域コミュニティの崩壊は国土の崩壊につながるため、これを防ぐために大学が地域に入ることは画期的な取り組みであるが、この取り組みを実効性のあるものにするためにも、活動を通じて地域がどのように変わったかを評価していく必要がある、この点が評価できる指標を盛り込んでもらいたい。例えば、地域の方々の考え方が現在と5年後でどのように変化したかを把握できる指標等。

資料の中にも課題として挙げられているが、大学内および地域に対する趣旨・目的の周知は重要な課題である。周知の努力を可能な限り行うこと、例えば地元紙に特集を組んでもらう等の取り組みを行うべきである。

【吉澤委員】